

MINAMI MADO

2024.9. No.49



独立行政法人 国立病院機構
大阪南医療センター

大阪南医療センター 循環器疾患センター



胸背部痛、呼吸困難、動悸等
循環器疾患が疑われる際には
緊急対応連絡先へご連絡ください。

24時間緊急対応 (ハートコール)

直通 TEL : 0721-53-3200



Instagramはこちら ▶



LINEはこちら ▶



大阪南医療センターの婦人科がん診療

近年、がんの遺伝子研究が進み、婦人科で扱う悪性腫瘍の治療法にも大きな変化が見られています。今までは臓器特異的であったがん診療は、遺伝子などの変化により分類される臓器横断的なゲノム診療に大きく変化してきました。当院では子宮がんや卵巣がんなどの治療においても腫瘍内科などの診療科および薬剤部と連携を強化することで、手術や薬物療法などにおける合併症や副作用などのコントロールを行い、患者さんに安全かつ最適な治療を受けていただける環境を提供しております。

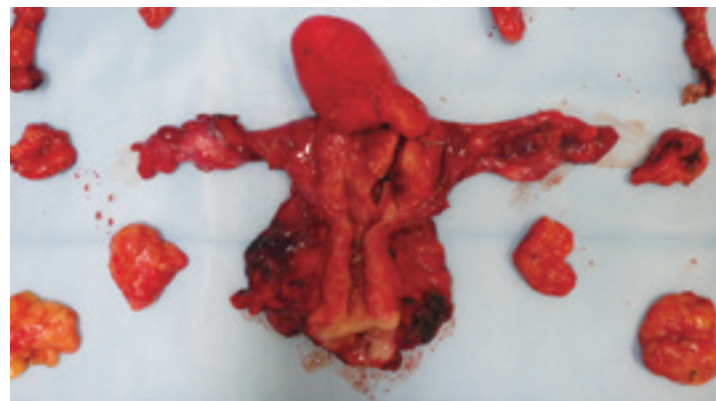
卵巣がん

卵巣がん治療では、進行例であっても手術で腫瘍を取りきることが、予後を大きく左右する因子であることは以前より多くのデータで示されてきました。しかし、卵巣がんが進行すると完全切除が困難になるケースが多いのも事実です。近年、PARP阻害剤が卵巣がん治療の維持療法として登場してからは、遺伝子検査で相同組み換え修復欠損が見られる症例では、完全切除が達成できれば抗がん剤治療に引き続きPARP阻害剤を使用することで、3期の症例であっても生存率が飛躍的に向上するというデータが広く知られるようになりました。当科では進行例であっても子宮や卵巣のみならず、腹膜切除や横隔膜ストリッピングなどの技術を駆使し、時には外科などと連携し、他臓器の合併切除も含め腫瘍の完全切除を目指した手術を行っております。



子宮体がん

子宮体がんに関しては、従来、手術療法と放射線治療が行われてきましたが、術後補助療法は放射線治療から化学療法へと変遷しました。しかし卵巣がんとは違い、有効な抗がん剤が限られており治療法が少なかったことが、特に再発の治療の困難さを増す要因となっていました。近年、がん免疫治療の台頭により、臓器横断的に使用できる薬剤が出てまいりました。マイクロサテライト不安定性の高い症例(MSI-H)に対するペンブロリツマブが代表例で、実は固形がんの中でMSI-Hの頻度が子宮体がんでも最も高いことが知られており、有望な治療の選択肢となっております。また再発の治療ではMSI-Hの如何に関わらず、ペンブロリツマブとレンバチニブ(血管新生阻害剤)の併用治療が2021年の年末に保険適応となり、広く診療で使用されるようになりました。



地域の先生方へ

このように子宮体がん治療でも、がん免疫療法が新規治療法として実臨床に参入しておりますが、従来の抗がん剤治療とはその副作用において大きく違うところがあり、所見に気付かず対処が遅れ、重大な事態を引き起こしかねない危険性もあります。当科では、がん免疫療法の取扱いに習熟している腫瘍内科と連携し、副作用が安定するまでは共観してもらうことで、より安全ながん免疫療法を導入しております。

以上のように当院では、侵襲の大きいがん治療をより安全に、最大限の効果を引き出すべく多くの部門と連携を強化し、診療に従事しております。婦人科がんを疑う患者さんがおられましたらぜひともご紹介をお待ちしております。



産婦人科医長 金村昌徳